

〈論文〉

大学教育のなかの「開かれた学びあい」をめぐる
ナラティブ的探究 (1)
— 表現アートセラピー体験から得た、教師が学生と
「対話的」に関わることの意味 —

荒木 奈美

1 はじめに

大学生の言葉にならない「こころの声」をもっとしっかりと聞き取りたい。ずっとそう思ってきた。大学教師として学生たちと関わって8年が経つが、いつも私¹には何か足りないと感じてきた。学生たち自身の過去の教育体験に触れる授業をきっかけに、学生たちの生の声には数多く触れてきた。不登校だった頃のこと、友達にいじめられて辛かったこと、気に入らない友達をハブにした「武勇伝」、今でも許せない先生への憎しみ…でも伝えたいこと、本当はそこではないのではないか。その姿勢その表情は、本当はこの話の向こう側にある別の話をしたがつているのではないか。それならば彼らの本当の話聞くために、自分ができることは何だろう。

そのような思いから始めた研究であった。「こころの声」とはどこにあるのか。そもそもそのようなものが存在するのか。もしそれを探れるとして、その方法はどこにあるか。科学的なアプローチのもとであれば大前提となるであろう仮説も方法論も、ないに等しかった。それでも心ある学生たちや友人の協力と励まし、機会に恵まれ、1年ほど試行錯誤を繰り返した中でようやく見出した一つの方向が、今回経過報告として取り上げる表現

1 行為主体である私のナラティブに着眼し、その解釈によって見出される新たな気づきを知として認めここに意味づけをしていくナラティブ・アプローチのスタイルを取る本研究の性質上、本稿では筆者の言説をすべて「私」として一人称表記し、「～かもしれない」という不確かな感覚や、その後の「わかった」という気づきとセットでそれがすぐに「やはり違っていた」と覆ってしまう心の揺らぎもすべて書き留め、この「私」の変化を対象化している。

アートセラピーの知見を生かすことだった²。竹内敏晴は自身の障害体験から人間のことばと身体との関係を開き直し、“からだこそが私である”³ということに身をもって気づいた体験を語る（竹内 1975,p.91）。初めて読んだ時から、これこそが今の教育に必要な感覚ではないかと直感していた。からだが何かを感受し、情動が沸き起こる。そのままでは済まなくてこの気持ちをどうにか表現したいと思う。からだが動く。見えた色や形で描く。聴こえてきた音をつかむ。ぴったりの言葉や表現を探す。そしてその表現行為を媒介として、そこにあらわれたものに宿る力の中にこそ私がいる。表現された嬉しい気持ちの中に。悲しみに暮れる思いの中に。表現アートはだからこそ、そのようなからだの中にあるその人の思いを、あるいはその人そのものを引き出すための重要な手段に他ならない。

そのような気持ちで私はこの表現アートを、学生たちの心の声を引き出す手段の一つになりうるものと期待し、このときは確かにその気持ち一つで、その学びの場に向かった。しかしそれは偶然か必然か、私にとってもっと重要な気づきの入り口となった。

私は今、ナタリー・ロジャーズが開発したトレーニング方法をベースに独自のプログラムで展開されている表現アートセラピーワークショップに学んでいる⁴。月に1回全6回のプログラムで、現段階で学び始めて3ヶ月になるが、時間をかけてゆっくりと「自分を知る」ことが統一テーマとなっている。この日々の中で実感したことは、このプログラムには、実際に思い描いた「方法」以上の重要な意味があるのではないかということである。

「自分を知る」類のワークショップには以前より強い関心があり、これまでも数え切れないほど数多く参加してきた。だからこそどこかで「自分はもう自分自身をすっかり知り尽くしている」くらいに考えていたと思う。それが実際はそうではなかったということになる。言い換えれば、表現アートには、人が意識して操作する思考回路とは別のところでどうしようもなく自分自身と出会ってしまう過程がある。そしてそれは、もしかしたら他の方法を遥かに超えて強力に、圧倒的な力をもって、いやおうなしに、人の変容、解放に結びつけてしまう力を持っているかもしれない。頭でっかちで、いつでも思考が邪魔をし

2 表現アートセラピーはナタリー・ロジャーズ (Rogers,N.) が提唱した深い人間理解を志向した癒しのためのトレーニングである。綺麗な芸術作品を完成させることが目的ではなく、「心の内界に深く入り、自分の感情を発見して表現すること」が目指されている。診断や分析、治療を目的に行う医学モデルのアートセラピーとは根本的に違い、支持的な環境で、多様なアートを用いて、成長と癒しを促すことが目的とされている。

3 引用した本文は「からだとは世界内存在としての自己そのもの、一個の人間全体であり、意識とはからだ全体の動きの一部の謂いにすぎない。」(竹内 1975,p.91)

4 アトリエワイエスが主催する「表現アートセラピートレーニングコースー創造と表現の世界を探索するー」2018年10月—2019年3月のコースに参加している。

て一向にその境地には至らなかった私が、ついに「自分と出会った」と言い得る体験をした。そして今は、今度こそ本当に⁵、ロジャーズ (Rogers, C.R.1961) の言う「人になる」ことの意味を、実感している⁶。

一方で、私がこれまでこだわってきた「主体的に学ぶ学習者」を育てるための重要なヒントがここにはあるという副産物も得た。私はこれまで、アクティヴ・ラーニングと言われる学習活動に自分なりの仕方でも真摯に取り組み、それなりの実績も積み重ねてきたつもりであったが、自分のしてきた活動がいかに「非主体的」で「非対話的」なものであったかを思い知らされた。その「小さな自負心」は今回の気づきによって根本から覆されてしまった。そしてそれは同時期に現在進行形で取り組んでいた活動⁷を心がまえの段階から見直さざるを得ない経験ともなった。

本稿は、私自身が体験した表現アートセラピーでの学びを通して実感したことを出発点として⁸、昨今の教育界で取りざたされている「主体的、対話的に学ぶ」ということの意味を見直し、その中での教師の役割を改めて問う内容の前半である。大学教育での「開かれ

5 「本当に」の実感は、本研究が今後明らかにしていく学生の「こころの声」の解明に一步近づいたものという実感でもある。林竹二が竹内敏晴との対談のなかで使った「自分の生地から出てくるもの」(p.207)としての「なまなまし」(p.55)をもって学生の前に立てるのではないかという思いに至った。(林、竹内 2003)

6 ロジャーズは *becoming a person* という表現を用いている。この実感については本稿 2-7 でその経緯を考察している。筆者は 2014 年に本研究の前身となる自己リフレクションを繰り返していた時期に、たまたま読んだカール・ロジャーズの自伝 (諸富 1997) の内容と自分自身の自己研究の経歴の内容が重なり、彼の「人になる」ということが自分のありのままをさらけ出してそのままを生きることであるという主張の本質部分を掴んだ気持ちでいた。今回のワークショップを通して、この当時の理解がいかに浅薄なものであったかを思い知らされたということになる。

7 ゼミの活動の一環として小学校で大学生と小学生の交流授業を実践したことを指している。後述する開かれた学びあいの場を目指し、大学生と小学生、教師と大学生ができる限り対等の立場で授業を進め進行の中で見舞われるさまざまな課題に直面しながら体験的に学んでいくことを目指したが、「対話的」の意味を今回改めて問い直し、その出発点そのものに欠陥があったと言わざるを得なかった。そしてこの反省をもとに次の活動に向けて今なお学生たちとの対話を続けている。この一部始終については稿を改める。

8 自分自身の経験を記述する方法は、研究者がよりどころとする学問的分野および研究方法によってさまざまである。筆者はクランディニン (Clandinin, 2000) が提唱するナラティブ的探究の立場から、語られた言葉に依拠しそこから見えてきた意味から見出された知 (「ナラティブ知」) (荒木 2016) を求めることを目指しており、本稿でも極力経験の中で自分自身が感じたことをその時の感情そのままに描き出すことが肝要と考えた。そのため記述の方法としては鯨岡 (2005) のエピソード記述、キーン (Keen, E. 1975) の現象学的方法を参考にし、最初に感じた印象や不確かな感じ、自分の中で同時に芽生えた相反する思いとしての揺らぎなどもそのまま現れるような表現を心がけた。本文の中で筆者自身を「私」と表記するのも、その思いがもとになっている。

た学びあい（アクティヴ・ラーニング）」⁹を舞台にした自身の研究主題のスタートとして位置付けた取り組みでもある。本稿では紙幅の都合で、本研究を進めていく研究主体としての私自身が自らの経験を通して立ち位置を問い直すまでがその中心となっている。

2 表現アートセラピー実践から学んだこと

2-1 概要

1回につき二日続きの行程、月1回のペースで全6回から成るワークショップの第2回目に当たる当該回のテーマは、アトリセラピーであった。絵本や絵画、映像に描かれたイメージや表象から自分なりに言葉や物語を引き出す作業の中で、自分の中の何かに気づくという取り組みであった。主宰者エリさんから「今回のテーマはナラティブ・セラピーです」と告げられたとき、私は「それなら私はずっとやってきたことだ」と気楽なかまえてこの回の活動をスタートしたことを思い出す。実際にナラティブ・セラピーを学んだことはなかったが、ナラティブは私にとって、かなり身近な言葉でもあった。専門分野は文学で、ナラティブ分析から文学解釈をすることを方法として好んでいたこと、学生とのインタビューではナラティブの探究の方法を取り、学生の語りの中からその本質を聞き出そうとする取り組みを続けてもいたこと、だからこそ自分語りとしてのナラティブも、もう何度も繰り返しているつもりになっていた。

二日目の活動はとてもユニークな内容で、三人一組になり、一人が語った自分の人生物語を二人の仲間が作文と作絵を分担して一つの絵本として仕上げるといったものだった。1日の中でそれぞれの人生物語を傾聴し、絵本を構想し、作品として仕上げるところまでいくのは少々過酷な作業でもあった。

絵本化する際の条件が一つあった。それは「絵本の主人公となる人が勇気をもらえるような物語にすること」。ナラティブ・セラピーには、その人が知らずしらずに決め込んでしまった「ドミナントストーリー古い物語」を解体し、新しい物語（オルタナティブ・ストーリー）（以下「新

9 大学教育における「開かれた学びあい」は、筆者が自身の教育実践の中でその教育的可能性を模索している授業形態のあり方である。始まりはアクティヴ・ラーニングとされる学校教育で盛んになりつつある新しい学びの形に近いものと考えて実践を続けていたが、次第にその目指すところが根本的に違うということに気づき、今は文部科学省が提唱する内容のものとは一つ線を引いて、別の形として実践を続けている。オープンダイアログの理念である、参加者が対等に関わり、解決を求めない姿勢（斎藤2015）、ヴィガー（Wigger,L.2014）が言うところの教師と学生が関わり合うことで見出される「人間形成」をベースとし、実践の中で参加者が繰り返し語り合うナラティブの力で問題に気づき、乗り越えることで「全体性（Ganzheit, wholeness）」への気づきを深めていく過程を何より大事にする学びのあり方（吉田2007）をここでは想定している。

しい物語」として表記)として書き換えることで癒されていくという過程が不可欠であるという(野口2002,p.80-82)。だからこそ「新しい物語」にはその人が自分の物語としてフィットできる世界観と共に、明日勇気を出して一歩踏み出せるエネルギーを込めて「ギフト」として差し出す気持ちが必要ということだった。

もちろん私自身も仲間の人生物語を聞き取り、共感し、その気持ちが少しでも豊かに反映するような絵本作りに意欲を示し、実際にも勤しんだつもりだが、やはり終始心配だったのは、自分自身がどんな絵本をプレゼントしてもらえるのかということだった。私には人に大いばりで話せるような人生物語はないという自覚があった。どの時代の私もいつも役割は脇役で、主人公になったという自覚は一度もなかった。主人公になりたいという気持ちも持ったことはない。努力家であったためにそれなりに満足できる大学生活を送り、教師にもなってたくさんの生徒や学生と出会い楽しい毎日を送ってきたとは思いますが、全般的に見てひどく地味でつまらない人生だと考えていたし、私のような取るに足らない人間のことなど書いてもらうなんて申し訳ない、できることなら私は語らないまま終わりたいという気持ちすら持っていた。

2-2 人生物語を語る中で気がついたこと

私の語りは3人の中で一番最後だった。驚いたことはくじ引きで偶然導かれた二人の仲間の人生物語が、着眼点によってはひどく私と似通っていたこと。そして二人の話聞く中で、本当は私も相当な起伏の多い人生を送ってきたということを思い出したことだった。特に小学生時代のことは語り出すまでほとんど覚えていなかった。出来事は思い出せてもその時に感じたことの記憶がすっぽり抜けていた。それを二人の話聞きながら、自分の経験と重ねて、ゆっくりと静かに考え始めていた。

ドキドキが止まらなくなった。思ったことを人に伝えられなくて、結果いつでもその考えを「なかったこと」にしてしまっていたこと、誰にも求められていないのに、姉としていつでも一歩引いた振る舞いを自分に課していたこと、男の子にからかわれたことがひどく身にこたえて傷ついていたこと、家庭内のいざこざに人知れず悲しい思いをしていたこと、一度思い出しはじめると芋づる式にさまざまな記憶が引き出されてきた。

もしや私はこれを仲間の前で語るのだろうか。いやそれはないな、最初に考えていた、「本当の自分」とは何かを追いかけて研究を続けた30年間の話をすればいいや。でも… 自分の中で葛藤が起こっていた。

それでも自分の番が来たときには自然に、引き出されたばかりの「新しい記憶」を語っている自分がいた。仲間たちはふらふらといたりきたりでおぼつかない私の話を、それ

でも私の目をしっかりと見つめて聴いてくれていた。1時間という与えられた自分語りの時間は、非常に静かでゆったりとした充実した時間を感じられた。5分ほど早く語り終えたが、私はもう十分という思いがしていた。上手く表現できないが、ほわっとした空気に自分の身が包まれている気分だった。

語り終えて改めて気づいたことは、私はこの数十年間、自分にとって都合の悪いことはすべて忘れてしまっていたのだということだった。それともう一つ、私の物語は切り取る場所によっては決してつまらない人生ではなく、波乱万丈で失敗も多い一方「成功」がなくもない。ドラマになりそうな物語も見え隠れしている。にもかかわらず私が最初に語ろうとしたのは、平凡でつまらない人生しか送ってこなかったという「ドミナントストーリー」であった。そして結果的に私が語ったのは、「がんばってきたのにみんな私をちゃんと認めてくれなくて本当は寂しかった私」というネガティブ気分満ちた物語だったということであった。

この段階で私は、語るということは記憶の開示であるということを実感した。逆の見方をすれば、語らないということは記憶の封印である。私は、自分にとって都合の悪い物語を記憶の隅に押しやっていたが、それを思い出した時に自然な気持ちで語る事ができた。「成功」したことや楽しかった思い出の方は、頭に浮かんでいるにもかかわらず積極的に語らなかった。私はどうしてこれまで、よい記憶も悪い記憶も「封印」して、「ごく平板な人生」を自分の「^{ドミナントストーリー}古い物語」として採用していたのか。

この時頭に浮かんだ思いは多々あるが、特に私が強く感じたことは、むしろ自分自身への「感謝」であった。そうやって私は自分を守ってこれたのだという自信にも繋がる感覚である。私が思い出してしまったことは、確かに仲間が驚くほどに悲惨な記憶も含まれていた。楽しかった記憶は自分の身が浮き立つような「成功譚」にもなりえた。しかしどちらを取っても、それを忘れていたからこそ私は謙虚にかつ強くたくましく生きてこれたのかもしれない。

何よりここで大事なことは、このことが私にとっては本当に初めての心から自分を肯定できた経験となったということである。そしてこのホッとした気持ちと一緒に、新たな気づきも湧いてきた。平凡でどこを取っても人を凌ぐような能力もないのに、身にあまるような生きる場所を与えられて、だからこそいつでもそこを自分の居場所ととらえられない自分がいた。ごく平凡な人生ストーリーを「^{ドミナントストーリー}古い物語」として生きてきた自分のからくりも見えてきた気がした。だからこそ「成功譚」は自分のものではなく、「かわいそうな私の物語」の方が自分にとってのリアルだったのだ。そしてその上で私がずっとこだわってきたナラティブの意味も見えてきた。やはり「語る」行為は、語るその人の変化を促す一

助となること、語らなければ気づかなかった自己認識につながるものであること、一方で「語らない」ことで自分の身を守るというのもまた「語る力」だということ、そして何より気がついたことを自分の言葉で語るという行為は、人を一歩前に進ませる力があるのだということ。自分の中でさまざまなことが一つに結びついていく充実した感覚があった。

2-3 私の人生物語を書き換えてもらう中で気がついたこと

ワークショップの中ではさらに二人の仲間によって私の人生物語を書き換えてもらう中で新たな気づきがあった。まず私が作ってもらった絵本を紹介する。

「えんとつ なみちゃん」

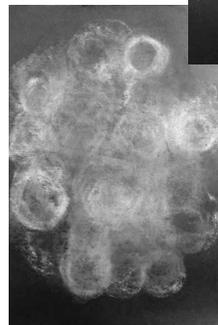
えんとつに住んでいる なみちゃん
かたちは なんだろう 見えるかな

下からは ときどき 火のけむり
目を開けては いられない
上から ときどき ほこり
口を開けては いられない

毎日は 数時間の光と暗闇
鳥たちが こっちへおいでと呼んでも
けむりたちが 運んであげると言っても
なみちゃんは 耳をかさない
「ううん、いいの」

えんとつの 上から 1/3
下から2/3が なみちゃんの定位置

なみちゃんのかたちは 何だろう
みんな知らない 知りたいな



「その時がくるまで
もう少しまって」

絵本の中の私はすごく寂しそうに見えた。清潔そうな出で立ちで遠くから世界を眺めている姿が、私の抱いてきた世界観とびったり重なっていた。本当はいろいろなものにまみれている現実社会に入っていたい。下世話な話も嫌いではないしその中で世俗的な人間関係を私も築いてみたい。なのにいつもそれができないまま、遠くから眺めているだけの私がそこにはしっかりと描かれていた。絵本の前半を読み聞かせてもらい、私は自分がなんて寂しい人間なのだろうと改めて思った。自分の語った「新しい物語」の方の再現がそこにしっかりと描かれていた。

ところが後半になると、私の予想は完全に覆された。最後の絵はもやもやした煙だけが画用紙いっぱい描かれている。そしてセリフが読まれる。「なみちゃんのかたちは何だろう みんな知りたい 知りたいな」

このシーンで私は涙が止まらなくなった。言葉にならない情動が溢れてきた。確かに私が「みんなのことを知りたかった」ことは、私にも自覚がある。しかし「みんなも知りたかった」ということは考えたこともなかった。いつもおどけて「私のことなど誰も興味ないよね」というのが口癖で、そのように言うことで、自分を安心させていたところがあった。私の中には、そういう意味において「他者」が存在していなかったのかもしれない。孤独な世界に身をおけば、何かと傷つかなくて済むから。でも本当は・・・

安心できる空間の中で、仲間に自分の存在を認めてもらい、自分のことを知りたいという言葉までもらえたことが、私にとって思いのほか喜びとなった。ずっと他者と関わることが怖かった。だからおそらく都合の悪いことはすべて「なかったこと」にして、表面的に人と関わるだけでやり過ごしてきたのだろう。そのようにして自分を騙しながら、思考操作で先回りして自分が傷つかないようにして、「他者」を遠ざけて暮らしてきたのかもしれない。

本当のところはわからない。これもナラティブの一つの「成果にすぎない」のであって（つまり私がそう思いたいから語ったままで、それは正確には現実ではないということ）、それ以上のものではないかもしれない。しかし大事なことは、素直な気持ちでそのことに気づくことができ、それを受け入れようとしている私が今ここにいるということである。少なくとも、情動から働きかけられ、これまでは至れなかった深いところで自分を認めることができた自分自身がいるということである。なんとも言えない気持ちになった。無防備に自分が「ひらかれる」気恥ずかしい気持ちと共に、もう「なかったことにはしない」

という覚悟のようなものも芽生えていた。感謝の気持ちと共に、何度も結末の部分を読み返していた。

2-4 考察1 自分で自分を価値付けすること

ここまでの自分語りを踏まえ、私自身が書き出した物語¹⁰から気づいたことを探究的に取り上げ、このナラティブ的探究によって見出された知をもって次項のトピックスに繋げていきたい。

まず取り上げたいのは、都合の悪いことを忘れ、記憶を「封印」していたことに気づいた後に浮かんだ思いを述べた、次の記述である。

この時頭に浮かんだ思いは多々あるが、特に私が強く感じたことは、むしろ自分自身への「感謝」であった。そうやって私は自分を守ってこれたのだという自信にも繋がる感覚である。

自分の中にあつたネガティブな記憶も含めて思い出してしまったこの経験を「何よりここで大事なことは、このことが私にとっては本当に初めての心から自分を肯定できた経験となった」と自己評価までしている。

最初に感じた「感謝」のような気持ちは、その後このことを何度も思い返し、学生との対話の中で複数の人に語る中で、次第にこの行為は自分で自分を肯定的に価値付けた、初めての経験になったのではないかと思うようになった。この思考の変化をどのように説明すべきであろうか。

自分にとって都合の悪い記憶はすべてなかったことにして生きてきたこれまでの私は、一つの思考の構造の揺り戻し (oscillating) パターン (Fritz,R., Andersen,W.S.2016)¹¹として、「嫌なことは忘れていつでも前を向いて生きていく」を心得ていた。確かにそれは毎晩寝る前に嫌なことを思い出さずにぐっすり眠れたり、毎朝目が覚めて布団から離れる

10 本稿で使う「物語」はすべてリクール (Ricoeur, P.,1983) の定義を踏まえ、ナラティブ (Narrative) の意味で用いている。すなわち自分の中にごちゃごちゃになっている語られていない経験を筋の通った物語として語ることで自分にとっての一つの意味を見出す行為そのものが「物語り」であり、その営みによって語り出された一連のストーリーを「物語」としている。Narrativeという言葉は、「物語」であると同時に「物語り行為」でもある (保坂 2014)。

11 フリッツ (Fritz,R2016) は、思考の構造を「マクロ構造パターン macrostructural pattern」として二つに分け、ロッキングチェアの構造のようにいったん前に進んでもすぐにもとの位置に戻ってしまい永遠に同じ動作を繰り返す「揺り戻し oscillating パターン」と、一つの成果が次の成果を呼び起こす「前進する advancing パターン」として、自分のこだわり (identity) を手放せずに前者のパターンを繰り返す思考習慣がいかに自分自身の人生を苦しめているかを説明している。

時に「私に心配事は何もない、さあ今日もがんばろう」と力強く起き上がるためには十分な効果があったに違いない。しかしそれは見方を変えれば、本当は自分の行いに自信もなければ前に進む勇気もないのに、それを隠して自分に嘘をついているということだ。「本当は人に見せたくないことをたくさん抱え込んでいて、弱くて不安だらけのダメな私」を否定している。つまりは自分の価値を低く見積もり、だから隠さなければいけないと思いついでいる。この思考パターンを続けている限り、私が私の価値を自分で認める日は永遠に来なかったであろう。ところが私にとってはこの「それがかえって私を助けていたのかもしれない」という気づきをきっかけにして、自分の物語に対する見方を180度転換することに成功している。フリッツらが言うところの「構造」が「前進する(advancing)パターン」に変わったように見える。

自分の人生を「最も大事な創作物」とみなし、自分自身(「創作者 creator」)と「創作物 creation」を切り離すことで自分の人生の見方を変更するという提案。それは対象者がこの創作物と自分自身を混同してしまうことで苦しくなってしまうからという。自分の人生の中で「成し遂げたこと」が自分にとって「社会的な価値の更新にどれだけ貢献しえたか」を常にチェックしてしまう人。適正な評価が得られるか否かで自分の行動を抑制しようとする人。このような人はみな自分の人生という創作物と創作者としての自分自身を混同している。自分にとって都合の悪いことは記憶の彼方に「封印」して、本当は自信も持てずに不安で仕方がない不安定な状態で、それでいて現実生活の中では前を向いて元気に暮らしているという私の生活は、この見方からすれば創作物を創作者の自意識で覆って、創作者主体の創作物に作り変えているということになる。これこそが私の苦しみのもとを作っていたのではないか。なぜそのような形で「改変」せざるを得なかったのか、その根源を探ると見えてくるのは、等身大の自分に価値を見出せない私自身の「弱さ」かもしれない。

この「弱さ」について、フリッツは次のような分析をする。ある政治家の手記を引用し、彼は、理想の自分に及びもつかない等身大の自分を何とか努力して自分のものとするために、ダメな自分の自己像を利用しているとする。自分がこしらえたこの「嫌な思い込み unwanted beliefs」を使って、だから自分はよき市民にならないといけないと常に自分を追い込んでいることになる。そしてこのパターンは思考が自身の「自意識 identity」に焦点化しているために(日本語の感覚で言うと自意識過剰になっているために)本来の姿を見せることがだんだんと怖くなり、仮面をつけることが日常化してしまう。気づけば誰とも本当の人間関係を保てなくなってしまうという。「弱さ」の根源には確かに、自意識過剰な状態に入り込んだまま自分の「創作物」をコントロールできなくなった、哀れな「創作者」の姿がかいま見える。

この分析は、おそらく長きにわたり自分自身のすべてを覆い尽くしていた思考のからくりにもびったりはまっていたように思う。改めて気づくことは、私の問題はこの「自意識の壁」だったということだ。そしてこのようにして自分が逆説的によりどころとして頑なに築いてきた強固な砦を、「それが逆に私を守る盾になってくれていたのか」という気づきによって、自分の価値を自分で認めることができたことによって、私自身の意思で外すことができた。イソップ寓話「北風と太陽」の逸話を思う。外側からどんなに働きかけてもそれは当事者の気持ちを頑なにするだけだ。内側からなら簡単に変わりうる。私もまた結果的に、自分で気づいたからこそ、あれだけ頑強だった要塞を簡単に取り壊すことができたと考えている。

2-5 考察2 自分の記憶に封印していたネガティブな物語を語る意味

次に取り上げるのは、「封印」していた記憶を取り戻した私が「新しい物語」として「本当は寂しかった私」を語ったことの意味である。その時は自分でも意味づけられなかったことを改めて問い直してみたい。

私の物語は切り取る場所によっては決してつまらない人生ではなく、波乱万丈で失敗も多い一方「成功」がなくもない。ドラマになりそうな物語も見え隠れしている。にもかかわらず私が最初に語ろうとしたのは、平凡でつまらない人生しか送ってこなかったという「古い物語」^{ドミナントストーリー}であった。そして結果的に私が語ったのは、「がんばってきたのにみんな私をちゃんと認めてくれなくて本当は寂しかった私」というネガティブ気分を満たした物語だったということであった。

この時の感覚として、学生時代を通じて「私とは何か」を研究主題として掲げ、大学で文学を教える教師の一人として「近代文学の歴史の中で自己を問う物語の変遷に見え隠れする日本人の精神史の構造」を学生とともに考え続けてきた経歴¹²を思うと、その自分自身のこだわりの根源にたどり着いたような実感があった。「本当の自分ってなんだろう」と問う疑問の中にあっただけは常に、この「本当は寂しかった私」を覗きたいという思いだっ

12 フリッツ (Fritz, R2016) は、思考の構造を「マクロ構造パターン macrostructural pattern」として二つに分け、ロッキングチェアの構造のようにいったん前に進んでもすぐにもとの位置に戻ってしまい永遠に同じ動作を繰り返す「揺り戻し oscillating パターン」と、一つの成果が次の成果を呼び起こす「前進する advancing パターン」として、自分のこだわり (identity) を手放せずに前者のパターンを繰り返す思考習慣がいかに自分自身の人生を苦しめているかを説明している。

たのではないかということである。

鯨岡（2006）は、「主体である」ということの意味が、「自分の思いを前に押し出すこと」と「相手を主体として受け止めること」という二面性に裏打ちされていることに気づいたときに大きく動いたという自身の体験を語っている。「主体的でありたい」と願うとき、私たちがすぐに浮かぶのは「自分の意見をはっきりと相手に伝える」ことであったり、「困っている相手にすぐに手を差し伸べてその困りごとを解決に導く」ことであったり、いずれにしてもはっきりしない状況や隠されている状況に対して自分の責任で行動して見える形に示すこと」という要素が強いのではないか¹³。

しかしながら「主体である」には一方で、「相手を主体として受け止める」という大事な要素がある。人や社会に対して「主体である」ために必要なのは、自分に関わる相手ないし社会の存在を認めることである¹⁴。この考えのもとでは、相手が自分とは別の考えないし生き方をもった一個の存在であることができはじめて、自分も同様の存在であると認めることができる。結局鯨岡にとって「主体である」ということは、一方で自分を前に押し出したい欲求を示しながらもう一方では相手を尊重して相手の欲求を受け止めながら共生していくという二つの相反する欲望「（自己充足欲求と整合希求性）のバランスをとること、「肯定的、否定的な両面の心の動きを経験し、それを「自分の心」として纏め上げていくということ」（p43）になる。

これに照らして考えると、私自身は自分の人生を「主体的に生きる」ことはしてこなかったと言うこともできる。平凡な人生という「古い物語」^{ドミナントストーリー}で自らを色付け、そうすることで人に受け入れてもらいやすい自己像を作っていたが、それは自分にとって「肯定的」な、受け入れやすい自己イメージの一つにすぎなかった。それを思い出したときに思わず語り出したのは、自分が「否定」したい、でも本当はそこに「自己充足欲求」が刷り込まれている両極のもう一方の物語だった。私は自分で自分を「主体として」認めようとした。自意識の覆いで隠されていた私の偏りが、ここで揺り戻された。そのように考えることが

13 セっかく勇気を出して相手を助けようと声をかけたのに結果としてその行為を無にされてしまった経験に対して「主体的であった」とはなかなか言い難い。「主体性を発揮しきれなかった」「セっかく主体的に行動したのに拒まれた」などと考える傾向がある。

14 ブーバー（Buber, M.,1923）が他者との向き合い方として「我—汝」「我—それ」という二種類のかま えがあることを明らかにしたように、互いに関わり影響を与えあう動きある人間関係に必要なのは、その主体が自分の中に「汝」を見出し、自分の中に「我—汝」という関係を見出すことである。その思考のプロセスがあればこそ自分が相手と主体的にかかわるための振る舞い方が見えてくる。そのことを抜きにして自分の考えだけで相手と関わろうとするのは、「我—それ」という互いの存在を認めあわない、主体的に関わろうとしない方のあり方である。その意味では自意識を全面に出して自分の考えを人に押し付ける人間関係は、主体的に関わる人間関係とは言い難い。

できたならば、ここで語ったこのもう一つの物語 = 「新しい物語」は、私にとってもう一つの自己回復につながっていたかもしれない。

2-6 考察3 「自分が蓋をして見えなくしていた自分の中の深い部分」の領域

私がずっとこだわってきたナラティブの意味も見えてきた。やはり「語る」行為は、語るその人の変化を促す一助となること、語らなければ気づかなかった自己認識につながるものであること、

第三の論点として取り上げたいのは、語ることで見えてくる領域の広がるイメージが、リクール (Ricoeur, P.,1985,1990) の物語的自己同一性「*identité narrative*」の概念を手掛かりに、おぼろげながらも形として見えてきたことである。

そもそも絵を描いたり音楽を奏でたり身体を感情に合わせて動かしたりする芸術活動がなぜ「セラピー (治療)」につながるのか。このことについてナタリーは「アートを通して自分を表現することで、感情が解放され、心が澄んで、精神が高揚し、高次の意識状態に至る、このプロセスが治療的」(p5) であると述べる。自分の中に押し込めていた感情や情動を形にして外に出すことは、えてして苦しみや迷いの元となりがちであるが、「自分を知る」ということを目的としているこのワークショップではとりわけ、自分の中の気づかなかった領域に表現アートがその一助となりながら寄り添って引き出すという要素が強調されている。その意味においてこのプログラムは、私たちが自分で蓋をして見えなくしていた自分の中の深い部分にアクセスし、そこに動いている感情や情動を掬いとり解放し、自分をより深く知るための重要な入り口でもあるのかもしれない。

「自分が蓋をして見えなくしていた自分の中の深い部分」というのはいかにも比喩的な表現であるが、自分の中の見えない未知の側面としての領域は、非言語的で非論理的、汲みつくすことのできない無尽蔵の領域である。その存在可能性だけは保証されているが、それは掘り出してみないとわからない。そのような見えない自己の可能性の側面を、リクールは「自己性 *ipseité* としての自己同一性」という語によって説明した。リクールは、語ることによって可視化される私のバックグラウンドに無尽蔵の領域として、いまだ語られていない自己の総体を見ていた。メルロー = ポンティであれば「*la parole parlante*」の世界とも言うこの領域 (Merleau-Ponty, M.1945) は、語られないため普段は見えないが、なんらかの危機があった場合に漏れてしまう私であるとしてリクールは説明する。

この領域にあるはずの「私」は間違いなく語られなければ見えてこないが、私自身がそ

うであったように、語られるのを待っている私の領域でもある。きっかけさえあれば、危機的な状況に置かれなくても語り出されることで見出されるのだ。何より表現アートセラピーの大きな力のひとつはこの領域に働きかけて、その人の見えない自分を引き出す可能性を秘めているところにあるのではないか。私の例で言えば、「平凡な人生を歩んできた私」を「古い物語」として生きてきた人が、「自分を知る」ことを求めて表現アートセラピーの門を叩き、絵を描き音楽を奏で自分の中の未知の可能性に働きかけた結果、自分には実は、他の人が簡単には経験できないであろう波乱万丈な人生があったことに気づき、「新しい物語」が引き出された。それは封印していた領域から引き出された私の「可能性」であり、自分で自分の認識を変えるひとつのきっかけともなった。

2-7 **考察4** 指導者自身が「ひらかれている」ということ

そして今回のナラティブの探究において最後にもう一つ取り上げておきたいのは、次稿の「主体的、対話的な学び」に関する考察にも直接結びつく、最後に感じた何とも言いようがない開放感とともに味わった「無防備に自分が『ひらかれる』気恥ずかしい気持ち」についての考察である。これまでの習慣では、私はすぐに自分自身の「思考の構造」の「揺り戻しパターン」に落とし込んでいたが、「パターン」が変わり、「主体として」の自分を受け入れたことで、このような気持ちが自然と芽生えたのではないか。

大事なことは、素直な気持ちでそのことに気づくことができ、それを受け入れようとしている私が今ここにいるということである。少なくとも、情動から働きかけられ、これまでは至れなかった深いところで自分を認めることができた自分自身がいるということである。なんとも言えない気持ちになった。無防備に自分が「ひらかれる」気恥ずかしい気持ちと共に、もう「なかったことにはしない」という覚悟のようなものも芽生えていた。

カウンセリングにクライアント主体のパーソンセンターアプローチを世に広め、全世界のカウンセラーたちに大きな影響を与えてきた、ナタリーの父でもあるカール・ロジャーズ (Carl,R.1961) は、晩年に自分の経験を語る中でこのようなことを語っている。

自分自身に優しく (acceptantly) 耳を傾け、自分自身を受け入れるとき、私はよりよい自分である (more effective) ようだ (p.18)

自分自身に耳を傾けるということは、肯定的な声も否定的な声も含めて、自分自身の中

の声を認めるということである。ロジャーズはこれができるようになると「あるがままの人間になりやすく」、自分の不完全さや思い通りにならない現実を受容できるようになり、それによって自分が変化することを受け入れられる姿勢ができるということ述べている。「人間関係が偽りのないもの (real relationship) になる」ということも強調している。関わりあうことが「生命力にあふれ、意味に満ちた、エキサイティングな経験」になっていくことで、動かなかった (remain static) その場が、変化ある動的な空間に変わる (tend to change)。互いがあるがままの状態に関わるということは、そこに変化をもたらす重要な契機となる。人と人が関わり、影響を与えあうことこそが人間関係の意味であり、そこで一方が自分の不完全さを認めず変化を恐れて縮こまっていたら、肝心の与え合いの動きは生まれにくい。人間関係に何より大事なことは、まず自分から心を開いてありのままをさらけ出すことであるとロジャーズは聴衆に訴えかけている。

それは本稿の論点に置き換えれば、自らが拵えてしまった「自意識 identity」(Fritz,R.,Andesen,W.S 2016) の壁を取り去って、学生の前に立つということにほかならない。自意識の要塞に閉じこもって記憶を「封印」していた私は、その要塞の中からは世界を見ていなかった。私が見えている世界はすべて自分にとって都合のよいものでしかなかった。自分の目には映らないものが見えない。学生たちの「こころの声」が聞こえないのも当然だ。そしてその原因が自分にあるということに気づいていなかった。自分自身がありのままの自分を受け入れていないから、他者のありのままも見えないのだ。人間関係においていつでも変化を望まなければならないということはもちろんいだろう。時には頑として学生の前に立ち「指導」的な振る舞いも要求されるのが教師というものかもしれない。しかしここで私は自分の意思で、学生との「対話」を望んでいる身である。それはロジャーズの言う変化のある人間関係を望んでいるということに他ならない。「人との関わりを求めて『対話』する」ということそのものに、この「変化」を求めるという意思が前提となっている以上、私に足りなかったのはこの「自意識の壁」を取り払うことだった。そのような思いに至った。

思いがけず自分でその殻を破ることができ、自分の中に「封印」していたネガティブな物語を語るできるようになったとき、私は自然な気持ちで、仲間の「知りたいな」という言葉に素直になれたのだと考えている。私が「知りたい」から他者が見えてくるのではない。相手が「知りたい」と言ってくれるから自分が現れるのだ、竹内の言葉を思い出す。からだか私。そこに伝えたい想いや情動があるから、表現が生まれる。そこに私が立ち上がる。人との関わりもきっと同じだ。そこに伝えたい人がいて、わかりあいたいことがあるから、関係が生まれるのだ。その相手には、自分のまだ知らない要素があって、

それを知ることで自分も揺らぐ。そのとき自分自身の見えなかった領域に触れることになる。その関係が揺らぐことで、知らなかった相手の一面が見えてきて、同時に自分の見え方も変わる。互いが出会いによって否応なしに変わりうる。出会う前には思いもかけなかった仕方で、互いに輪郭が変わっていく。それこそが人と関わることの意味なのではないか。まさにプーバーの言う「我—汝」の関係を作ることである。

自意識の壁に阻まれて私は、本当の意味で他者も世界も見ようとはしてこなかったのかもしれない。自己を問わず、自分の主体は偏ったままで「知りたい」「相手のこころの声を聞きたい」では、いつまでたっても私にとって学生は「我—それ」の関係に止まってしまう。私の中に「汝」を立ち上げること。そのためにまずは自分が自分として自由であること、人間であること。その上で「汝」の存在を認めること。

鯨岡が主体の存在に深く気づかされたのは、彼の妻の何気ない一言だったという。「むずがっている我が子を主体として受け止めようとするとき、養育者は自然に『おお、よしよし、いい子だからね』」（鯨岡 2006,p.36）。今泣いて苦しみを訴えている赤ちゃんにこの母親ができることは、泣き止ませることが第一目的ではないはずだ。母親がまず最初に自然にしていることは、まずは赤ちゃん自身の気持ちに寄り添うことであり、その苦しみを理解することであり、今苦しくて泣き叫ぶしかないその状況をただひたすら受け止めることである。

学校教育の日常に流されているとついついそのことを忘れてしまいがちだ。高校教員時代に進路に困って勇気を振り絞って相談に来た生徒に私は、ただひたすらパンフレットを探して学校紹介だけに一生懸命になっていなかったか。この時にまずすべきは、将来の行く末が見えなくて不安で仕方がないその気持ちに寄り添うことではなかったか。朝どうしても起きられなくて困り果てて私に相談してきた学生に、すげなく何かの病気かもしれないから病院に行ったらなどという言葉をかけて済ませては来なかったか。何をおいてもまずかけるべき、気持ちのこもった言葉があったはずだ。

今回私が表現アートセラピーの学びによって得たことは、このように考えると、教師として学生の前に立つときに何より必要なこととして、自意識の壁を取り払い、まずは相手の存在を受け入れてありのままに立つこと、そしてその存在の声のありのままを受け止めること。それによって自分自身も揺らぐこと。プーバーの言う真に「対話的」な関わりに

他ならない。さらには鯨岡の言う「主体として関わる」ことでもある¹⁵。

3 まとめにかえて — 『対話的』に関わること』の意味について考える

この「主体的」「対話的」という構えは、今まさに学校教育で問われている学び方改革をめぐるキーワードであり、一方で私自身が大学教育実践の中でその可能性を問い続けている「開かれた学びあい（アクティヴ・ラーニング）」における「主体的、対話的な学び」のあり方に深く通じているものである。私が授業づくりの中で目指してきた「主体的、対話的な学び」のあり方は、間違いなく本稿の考察の延長上にあるものである。

この観点からすると、今日このキーワードが世間に広く誤解されていることが、アクティヴ・ラーニングが本来の意味でのアクティヴな学びにならない一つの要因にもなっているのではないかという思いを強く抱く。

3-1 「対話」とは何か

そもそも「対話」とは何か。単純に考えれば、ただ人と人が直接言葉を交わして関わりあう行為、それ以上のものではないかもしれない。現在学校教育などでその方法論が華やかに取りざたされている「主体的、対話的で深い学び」における「対話的」とは、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ自らの考えを広げ深める」ことと定義されている。自分以外の人やものとの関わりを通じて「自らの考えを広げ深める」ことが目的となっているということで、単なる対話行為のことを指しているものではないようにも思えるが、そのようにして関わることで、実際にたとえば子どもたちの目の前にどのような世界が広がっていくかなどについては明らかにされていない。

「対話」には「哲学的な側面」と「実践的な側面」があり、対話の持つ可能性を議論する際には、そのどちらも考慮する必要があるという（Anderson,R., Cissna,K.N.1997 p.2）。本稿の立ち位置も同様である。学生の「こころの声」を聞きたいと願う研究の出発点でも、常に念頭に置いてきたのはその「哲学的な側面」と「実践的な側面」である。学生たちが自分でも気づかないままにわだかまっている「声」が彼らのどこかにあるとして、それは何が彼らをそのような状況に置いているのかを問う側面（「哲学的側面」）と、実際にその

15 本稿が主張しようとしている「開かれた学びあい」における教師の立ち方を明らかにするためにこの鯨岡がいうところの「主体として学ぶ」という観点がプーパーの言う「対話的」とどう交差するかというところは非常に重要な論点なのだが、紙幅の都合があり、今回は触れることができなかった。別稿で改めて論じる。

「声」を聞きたいと願ひそこに身を置き続ける側面（実践的側面）の両面からのアプローチが必要と感じている。であればこそ、この両側面の相容れない溝のようなものにはどうしても敏感にならざるをえない。

そしてこの揺らぎの部分に鋭く立ち入った「対話のための対話」を交わしていたのが、ブーバーとカール・ロジャーズであった。ここで交わされていた解決しがたい溝は、教育実践者として、そして教育哲学的な立場から教師と学生の学び合いを問うている研究者として、私自身が日頃感じてきたジレンマでもある。二人の議論の間に立ち、私自身改めて「対話」の重要性と、教師としてどのような立ち位置で「対話」に関わるべきかを深く問わざるをえないという心境にある。しかしながらこの迷いにこそ、私自身が本研究において問いつづけなければならない本質的な問題提起があるのではないだろうか。この問題に簡単に答えを出さず、繰り返し問い続けることにこそ、本研究の存在意義があるものと改めて考えている。

本稿ではその気づきを起点においた問題点の整理として、まずはそれを象徴するいくつかの対立項とそれについて私自身が感じたジレンマを感じたままの言葉によって記しておく。この記述についての次なるナラティブ的探究は、別稿に預ける。

3-2 「哲学的な側面」と「実践的な側面」のあいだで揺れながら、思うこと

3-2-1 「対話」において人はどれだけ相手の回復力を信頼すべきか

ロジャーズが自身の臨床経験から「人間の中には肯定的なものに向かう力がもともと備わっている」という立場を踏まえ、「対話」において大事にすべきは、治療者がその思いを受容し、同じ思いで治療に向かうことだと考えている。一方ブーバーは、「対話」において人間は、「両極的な関係」をもって存在しうるものという考えのもとにあり、「信頼できるものは同じ人における最も信頼できないもの」との関係の中にあると主張する。であればこそ、もしも人が目の前にいる相手を援助できるとしたならば、それはただこの両極間の関係を、彼自身が変わることができるように援助することだけであると考えている。

ブーバーがここで言おうとしたことと私自身の学生たちとの対話経験を重ねると、彼らの話の中には人間は光に向かう気持ちと同時に闇に落ちていこうとする気持ちのせめぎ合いがたびたび出てくる。それは私自身の人生経験の中でも体験してきたことでもある。人は理想を生きようとしても同時にそれが叶わない現実的な状況がありそれと引き合う負の心がある。そもそもその引き裂かれる思いの中で不安定に生きざるを得ないのが人間なのではないか。たとえ目の前に全面的に私を信頼して助けを求めてくる学生がいて、互いの合意のもとで「光」に向かう解決策を見出す状況になったとしても、この哲学的な視点は

外せない。学生の回復したい力に寄り添っていると、やはりロジャーズのような心境にもなるが、それだけでは学生たちの「こころ」には寄り添えない。プーバーが大前提としている、人間に対する「全的な wholeness」見方¹⁶が必要だと考える。

3-2-2 カウンセリングにおいて対話する両者はどこまで「対等」でいられるか

ロジャーズは治療者とクライアントという立場を超えて、受容的な関わりを深めることで両者は対等な関係になりうるという考えを持っている一方で、プーバーはかなり執拗に「それは両者の関係のあり方として不可能」と言い切る。どんなに治療者側がそのように働きかけても、治療を受ける側は「先生」を変えようなどという気は起こらない。それ以前に、治療を受ける人は病気を治したくて来るのであればこそ、それ以上の関係はそもそも求めていないのではないかというのがプーバーの主張である。それは教師と学習者の関係にも言えることだという。すでにその関係が構造的に対等な立場を拒否している以上、指導側の立場に立つ者は、その拭きたい関係性を忘れてはいけなとプーバーは強調している。それに対してロジャーズは、そのような関係性の中でもほんの時おり、両者が対等に関わってお互いに何かを得たという瞬間があるという。ロジャーズ自身はその瞬間を大切にしたいという考えを何度もプーバーに示している。

私自身もこのヒエラルキー的な関係構造の拭えないあり方についてはいつも意識してきた。どんなに私自身が対等なつもりで接しても、私が教師である以上、評価の鍵を握っていることは紛れもない事実だ。それは何より学生の方が感じていることだろう。しかしロジャーズの言う「瞬間」を実感する時があることにも首肯したい。その関係性は自覚しつつも、ほんの瞬間訪れるその「奇跡」は私自身も感じることもある。しかしそれはあくまでも私が感じた一方向的なものに過ぎないという自覚をどこかに併せ持っている。この両方向に広がる揺れ幅の中にこそ教師と学生の対話の意味はあるのではないか。今はこの感覚をもっと実践の中で味わいながらその意味を言語化してみたいという心境にある。

3-2-3 受容的に相手の話を聞くとはどういうことか

ロジャーズが対話で何よりも大切にしている「受容」という姿勢について、プーバーはかなりはっきりとロジャーズとの立場の違いを示している。プーバーによれば、ロジャーズの言う「受容」はその人をありのままに受け入れることであるには違いないが、それはプーバーの定義からすると現状においてその場でその瞬間に受け止めること以上の意

16 註9参照

味はないという。その代わりにブーバーは「確認する confirm」という概念を用いて、本来の意味で「対話」において相手を受け止める行為は、「他者の可能性全体を受け入れること」と説明する。Confirm という単語には、信仰を堅めるカトリック洗礼の儀式を confirmation というように、時間をかけて絶対に裏切らないという確信を得た上での受容というニュアンスがある。ブーバーにとって対話を通して相手を受け止めるという行為は、であればこそ無条件に目の前に人の苦しみを引き受けるということとは別の、それはあたかも神との契約のような、もっと大きな責任と確信をともなったものであるという印象を受けている。

山田 (2007) も指摘するように、この点についてはロジャーズの言う「受容」にもまたブーバーが示したような大きな意味合いがあるものとも受け取れる。ロジャーズの言う「受容」とブーバーの言う「確認」にはどちらも対話する相手が対話によって変わりうる可能性全体を含めているという意味合いがあるとしたならば、この姿勢にもっとも足かせになるものは本稿で取りざたした自意識に他ならないと改めて思う。

もう一つはこの意味合いにおいて学校教育の中における「対話的な学び」としてのアクティヴ・ラーニングを考えると、その学びに携わる主体が、そもそもこの「受容」「確認」の構えがないから難しいのではないかということだ。私自身もゼミの中で「開かれた学びあい」を実践しようとするのが最初に問題になるのは、学生たちがそもそも互いに「心を開きあっていない」というところにある。その場で学びあうためにはそれぞれが一つの「主体」になっていなければならないということを改めて思う。「主体的、対話的な学び」とはひとつなぎの概念であるということも痛感する。

3-3 改めて、教師が学生と「対話的」に関わるということ

最初に示したように、本稿は紙幅の都合で全体の半分で一旦筆をおく。ここまでの内容を振り返っておきたい。「開かれた学びあい」の教育現場で教師が学生と関わるためには、まず教師自身が自意識の壁を取り払い、ありのままを受けとめて「人間」として立つ必要がある。それはブーバーの言う「我—汝」としての対話に他ならない。今回の経験で私自身実感したのもそこである。

もっともブーバーが真の対話に必要なのはこの「我—汝」として関わることを考えたとき、ここにはさまざまな実際的な問題もあったであろう。その一つが、人はいつも相手が思い描いたようには動かない以上、マニュアル通りにはいかないということ、いつも前を向いているわけではないし、いろいろな理由から迷うのが人間であるから、本当に他者を受け入れるというのは実際問題以上に覚悟が必要ということ。ここに哲学的な問いと実際

的な取り組みのあいだの拭いきれない溝がある。本研究が時間をかけて明らかにしていかなければならないのはここに尽きる。その「あいだ」の意味は、語ることでしか明らかにならないと考えている。さまざまな活動や対話の中で両極に揺れる教師や学生たちの記述を通して、この後も根気よく追っていきたい。

参考文献

- Anderson, R., Cissna, K.N. (1997) *Martin Buber-Carl Rogers Dialogue: A New Transcript with Commentary*, the State University of New York Press (山田邦男 監訳『ブーバー ロジャーズ 対話—解説つき新版』春秋社 2007)
- Buber, M. (1923) *Ich und Du*, Insel Verlag. (植田重雄訳『我と汝・対話』岩波文庫 1979)
- Clandinin, D. J. & Connelly, M. (2000) *Narrative Inquiry*, Jossey-Bass
- Fritz, R., Andesen, W.S (2016) *Identity*, Robert Fritz (田村 洋 一 監訳『自意識』Evolving)
- 林竹二, 竹内敏晴 (2003) からだ=魂のドラマ, 藤原書店
- 保坂裕子 (2014) ナラティブ研究の可能性を探るための一考察 <Who-are-you?> への応えとしての<わたし>の物語り, 兵庫県立大学環境人間学部 研究報告第 16 号 p.1-10
- Keen, Ernest (1975) *A Primer in Phenomenological Psychology*, Holt Rinehart and Winston (吉田章宏・宮崎清孝訳『現象学的心理学』東京大学出版会 1989)
- 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門, 東京大学出版会
- 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ—主観性と相互主体性, ミネルヴァ書房
- Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la perception*, Gallimard (竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学 1』みすず書房 1967)
- 諸富祥彦 (1997) カール・ロジャーズ入門 自分が“自分”になるということ, コスモス・ライブラリー
- 野口裕二 (2002) 物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ, 医学書院
- 竹内敏晴 (1975) ことばが劈(ひら)かれるとき, 思想の科学社 (引用は『竹内敏晴の「からだと思想」1 主体としての「からだ」』藤原書店 2013)
- Ricoeur, P. (1983) *Temps et Récit 1*, Edition du Seuil (久米博訳『時間と物語 I』新曜社 1987)

- Ricoeur, P. (1985) *Temps et Récit 3*, Edition du Seuil (久米博訳『時間と物語Ⅲ』新曜社 1990)
- Ricoeur, P. (1990) *Soi-meme comme un autre*, Edition du Seuil (久米博訳『他者のような自己自身』法政大学出版局 1996)
- Rogers, Carl R. (1997) *On Becoming a person*, Mariner Books (村山正治訳『ロージャース全集 12 人間論』岩崎学術出版社)
- Rogers, Natalie (1997) *The Creative Connection: Expressive Arts As Healing, Science & Behavior Books* (小野京子, 坂田裕子訳『表現アートセラピー—創造性に開かれるプロセス』誠信書房 2000)
- 斎藤環 (2015) オープンダイアログとは何か, 医学書院
- L・ヴィガー, 山名淳, 藤井佳代 (2014) 人間形成と承認, 北大路書房
- 吉田敦彦 (2007) プーパー対話論とホリスティック教育, 勁草書房
- 荒木奈美 (2016) 教師が自分の実践をどう振り返るか—学び続ける教師の自己リフレクション方法について問う (上) 自分の〈枠組み〉を壊し, 他者と出会い直すために—, 札幌大学総合論叢, 第 42 号 p.77-97
- 荒木奈美 (2019) 大学教育のなかの「開かれた学びあい」をめぐるナラティブ的探究 (2) —学生との家族をめぐる対話から見えてきた「新しい物語」—, 札幌大学総合論叢, 第 47 号

本研究は, JSPS 科研費 17K18663 の研究成果の一部である。